

最近のブドウ枝膨病の発生動向と防除対策の現状

大分県農業技術センター ^{なか}中 ^お尾 ^{しげ}茂 ^お夫

はじめに

本病がブドウ枝膨病として公表されてから、すでに16年が経過している。本病は、1980年代から90年代にかけて、九州のブドウ、とりわけ基幹品種である‘巨峰’の最重要病害として、各方面から発生動向とその対策が大きな関心を集めた。これまで、関係者によっていろいろな取り組みがなされ、現在、一応産地対応上の防除技術は確立された段階になっている。

近年、本病に対する関心はかつてに比べるとめっきり少なくなった感がある。本病の防除技術が産地に浸透し、生産上あまり問題がなくなったのか、それとも他の果樹の枝幹性病害と同様、発生がすっかり定着してしまって、発生があってもことさら問題視されなくなったのか。

筆者を含め関係者からの本病に対する情報提供が少ないうように思われるので、若干の産地調査等を踏まえた最近の発生動向と防除対策の現状を紹介することにした。

I ブドウ枝膨病研究と防除対策の これまでの経過

最近の発生動向にふれる前に、本病についてこれまでの取り組みの経過を概略紹介する。

本病の研究は、1980年代に入って本格化し、1982年、大和によって未知種の *Phomopsis* 属菌による病害であることが報告された。その後、九州でも‘巨峰’の障害樹から類似の菌が分離されることが相次いで報告され、1987年、御厨・貞松によって既知のつる割病とは全く異なる新病害であることが明らかにされ、ブドウ枝膨病 (Swelling arm) と命名された。さらに、梶谷・山中 (1993) によって本菌の完全世代が発見され、その所属は *Diaporthe* 属菌であることが明らかにされた。このような経過と前後して、本病の発生はますます深刻化し、産地から問題解決に向けた要望が強く出されるようになった。これを受けて、1989～92年に、「ブドウ枝膨病の総合的防除技術の開発」と題した国庫助成研究 (地域重

要新技術開発促進事業) が、佐賀、福岡、大分の3県によって実施された。また、共同研究終了後も各県独自の研究が進められた。この結果、本病特有の病徴と被害、病原菌の形態および生理的諸性質、発生生態 (伝染源の所在部位とその形態、伝染源からの分散、感染および発病条件、感染様式、発病過程、品種間差異など)、総合的防除法 (耕種的防除法、薬剤防除法) が明らかになった (佐賀果試ら、1995; 田代、1994; 中尾ら、1995; 中尾、1998)。

大分県ではこれらの成果を受けた具体的な防除対策として、以下の項目を重点に防除指導を行ってきた。すなわち、①本病は典型的な雨媒伝染性病害であるので、安定生産を兼ねた雨よけ栽培を極力導入する。②本病は二次伝染しないので、剪定時に越冬伝染源部位を徹底除去する。越冬伝染源部位は多岐にわたるので、そのポイントを十分に啓蒙する。③剪定後、やむを得ず残った病患部は、病状の進行防止と他への感染防止のため塗布剤処理などで徹底治療する。④剪定後の枝誘引は、他の枝からの新梢への感染を防止するため、できるだけ交差または近接させないようにする (整然とした枝配置)。⑤薬剤防除は、発芽直前期 (4月中旬)、展葉2～3葉期 (4月下旬)、展葉6～7葉期 (5月上旬)、展葉8葉～開花直前期 (5月上旬～下旬)、開花終了直後～小豆粒期 (6月上旬～中旬)、袋かけ後～収穫前 (6月下旬～8月下旬) をポイントに、卓効薬剤のジチアノン、有機銅、フルアジナム、ペノミル、チオフアネートメチル、クレソキシムメチル剤などを、安全使用基準を遵守しながら有効使用する。⑥スピードスプレーヤ防除は枝幹への薬液付着に難があるので、走行スピード、走行間隔、噴霧圧などを十分調整して、枝幹への薬液付着を極力高めるようにする。⑦重症園では防除の実効が上がりにくいので、根本解決のためできるだけ一挙改植を取り入れる。この場合、高い実効が期待できる無核‘ピオーネ’の短梢剪定平行主枝整枝法による雨よけ栽培を導入する。

II 最近の発生動向と防除対策の現状

I 産地における発生状況と防除対策

大分県における枝膨病の発生面積は、1988年に行った聞きとり調査では658 ha (うち‘巨峰’および‘巨峰’群品種306 ha) 中約240 haであった。この時の調査で

Current Status and Control of Grapevine Swelling Arm in Oita Prefecture. By shigeo NAKAO

(キーワード: ブドウ, 枝膨病, 発生動向, 防除, 大分県)